

未来はどうなるか誰も知らない

その人はきつと、僕の眼帯に気づき、
また、その眼帯からはみ出た、赤い、
赤チンを塗った傷に気を取られ、
一種の好奇心から僕を見たのだろうか。

僕もその時は偶然にその人と視線があったが、
「あの人は僕をその様なつもりで見ているのかなあ」
と思い、学校についた頃には、もう完全に、
あの人の事は、頭になかった。

それから何日かたった。
「もうそんな事あったのかなあ」
と思う程であった。

あの日の朝は二度目の対面だろう。

また、同じ電車で、同じ車両で視線があった。
もう、僕の眼帯もとれていた。
その時、以前に、その人に会っていたことを
僕は忘れていたが、どこか、顔に、見覚えがある。

ふと、自然に何かを思い出そうとしていた。
「きれいな人だなあ。
ちよっと待てよ。
どこかで会ったような気がする。」

そう思っている間に、
僕がその人と視線を合わせた
その瞬間は、またたくまに過ぎた。